教師必携

詳註小學入門

樗蔭堅編

全

教育
E59

20909
教科書文庫
2
370
30-1876
20000
69750

中央図書館
教育学科
E59

榊原芳野編

教師必携詳註小學入門 全

明治九子年
五月出版

東京書肆神田豊島町一丁目
五百川喜平藏版

広島大学
教
69750
図書

詳註小學入門序

詳註小學入門序

方今小學有公立有私刱棊布三府畫羅六十縣其教道之者亦雲集霧會爲養蒙之受可不謂盛乎而遏裔僻陬蓬戶桑樞之兒子或有乏資不能入學者或有難入學而不能購其所謂挂圖者於是

乎本省有小學入門之撰海内頼
之雖然以本書不施傍訓間多深
讀至駭人聽者頃日榊原芳野氏
其背本省須布之意就原書傍
施國字每條注之題曰詳注小
學入門余一閲曰模目之民讀同
文之書不宜異之者而有此不同盖

因未有簡便此書也若使依此
書而東府縣如出一口則庶幾
為吾輩息肩之一助書而叙之
明治八年十月
東京師範學校長渚菖信澄

佐瀬得所書

詳注小學入門

例言

一此編各所の小學より於て其誦讀を異ならしむることを恐れて著はす所なり其五十音韻の如きハ特ふ注意を要を是諸言語の原なりて之を訛るときハ其末混淆せさること殘得されハなり

一巻中の動植一々綱目を擧くる者ハ兒童初より雌雄の蕚數等ハ注目せバ後來博物の學より從事せんとき未必裨補なくハあらバ

一本書改正を歷れと猶原板の舊ふ仍る者無き

ことに能はざる故を欄外其由を注して新舊の別を示し

一七色所生の解は本省色圖解ありて已に判ふ就く然れども猶これを了解し難しとする者あり今傍訓を施して再これを釋し生色の圖を加へてこれを卷末に附せ是亦原書と對照せば兒童光學の階梯たるべし

明治八年六月　　榊原芳野誌

詳注小學入門

榊原芳野釋

○四十七字

釋日本紀、河海抄等、皆僧空海の作る所とす、又河海抄に、一説いろはよりちりぬるをに至るまで、大安寺護命僧正作、わかよ以下、弘法大師の作るり、末に京字を加へたるは、慈覺大師なりといへり、然れども未詳なり、此四十七字は、四句七令様にして、唱ふるに、便あらしめんが為なり、涅槃

経、四句の偈ハ諸行無常是生滅法生滅々已寂滅為樂の四句なり 據まる
等の説ハ、牽強ハーて取るに足らず、

い 伊 伊ハ本聲以ハヤ行の字を假借せーて、其音を異にすれども、我國古来通用ーてこれを別ゝず、
ろ 呂
は 波
に 仁
ほ 保 保の略ゐれハほに作るハ非なり
へ 邊
と 止 止の略
ち 知
り 利

ぬ 奴
る 留
を 遠
わ 和
か 加
よ 与
た 太
れ 禮
そ 曽
つ 川
ね 祢
な 奈
ら 良
む 武
う 宇
ゐ 井
の 乃
お 奥
く 久
や 屋
ま 末 末の省るゝ故に上大ケラ人一
け 計
ふ 婦
こ 古

已の畧なれど上下接くへ　い　元八衣より轉せしそ伊と同しく其音あ行ょ
え　屬なれとも古来通用しそ別こと

て　手　あ　あの　さ　佐　き　岐　松　ゆ　遊

め　免　み　美　し　志　ゑ　恵　衡　ひ　比　玉

も　も　せ　せ　勢　す　す　そ

ん　古人もの轉鳴ゥしそ後自一種の字を成せるあり、方今ゥ
ンと同しく、掣音ょ用ゆるあり、

と　この別體、トと、との合字あり、トと同しく
通用ゥ、

○五十音

次序ハ梵家の法ょして、我國の創造ょ非ス
と雖も、我國の聲韵を律ぶべきハ、これより
過るハなし、倭假字反切義解ょ吉備真備
公ゥ作る所とす、是亦信ぜるょ足らず、今
各音の下ょ、其呼法を注し、都鄙の音を、同
一ならしめんとて、

アイウエオ

支那ホ韵（ヰン）といひ、西洋學家、これを母韵と称を、西域の悉曇成就の義なり是ふり、以下カサタナハマヤラワの九行、皆其音を異ふをもとも、長呼されハ、皆此五韵ふ歸を、故ホ其音昭然なり、然もとも、僻地或ハイエを錯（タガ）ふる者あり、只キシチニ等の音を、長呼しても、キーシー等の如く、呼息の極（イキヤム）ふ至りても、變せざるハ、即イホあり、ケセテ子等の音を長呼して、ケーセー等の如く、呼ひて變せざるハ、エホり、淺近此音なるを以て、忽ふもることなしの

れ、

カキクケコ

サシスセソ

此音、亦地ふ由りて、シ゜スを顛倒する者あり

然れとも、シを長呼されハ、シー、スを長呼されハ、スーふて、是亦混をべきふ非ず、較（ヤ）心戈用ゐあ（ア）ぞ訛る事あらべうらば、

タチツテト

是亦チツを顛倒を、其理前ふ同し、

ハヒフヘホ

是亦ヒフを混ぜる國なり、其理前ふ同じ、
但し、此ヒの音、東國シは誤る、東京尤甚し、心
を用ゐる、幼時より熟せば、自其訛を免れん、

マミムメモ
ヤイユエヨ

此行の音ハアイウエオふ、イの加ハ是るふ
る、其原音イアイイウエイオなり、故ふ此行のイハ、
ヤ上ふ再イの加まれる者なり、紅上ふ朱を
塗り、黒上ふ墨を濺ぐが如く、其音大ふ異ふ
なれど、且國語ふハ、古来別用せず、只字音ふを

別まざるを得ず、且此行のエハ、活語上ふて
別つべきう如しといへども是亦古より別
用せ一例を

ラリルレロ

國語の首ふ此音を、人の知る所なし

ワ井ウエヲ

此中井エヲの三音心を用ゐて習熟せべし、
訛りて其音と混ぜるといへども、四十七音中
ふ剰贅の字あるふ非れ固其言を異ふする
故ふ、別音の字を用ゐるあり、其呼法ハ井

ハウと仆との二合すして、或ハ誤りてビと聽、做し、或ハミと誤る、只上齒を以て、下唇を壓し、ウ井と唱ふれバ、自ら此音ハ適ふあり、若舌唇硬強ゑして自由ならざる者ハ、ウ井の二音ゑ唱ふとも、猶いと混ぞうふ勝れり、慣習の久しきと、呼法の疾促とまて、自唱へ得べし、エ亦同ト、ウエの二合ふれバ、上齒と下唇ゑ當て置きて、ウェと開き呼ときハ自ゑ適合そうなり、下章杖几の下併せ見るべし、ヲ上齒と下唇の奥ゑ當て、ウォと呼ぶあり、下章

魚の下對へ考ふべし

濁音

ガギグゲゴ

重濁音ハ論ふし、只一種の半濁、即非清非濁音といふ者、邊陬ゑて、動もそれバこれを難しとゑ、然れどもンガ ンギ ングンゲンゴと、鼻ゑ入れて呼へば、自ら生じ、因てナ行マ行と与ふ、入鼻音といふあり、上ゑ載せるゑ如く、年賀恭謙賢愚變化等の音を呼ぶときハ、呼ひ難きゑ非らず、我國ゑをも、只音便のミふ用ゐく、語

首ゐハ、無きを以て、これをくくとを、義を妨げ
ぢと雖、同くハ都下の如く、重濁とめ別ハ立ッ
べきなり、

ザジズゼゾ　ダヂヅデド

ザ乃行ハ、舌端聲なり、ダの行ハ舌本聲なり、
心しを呼バんことを要ス、

次清音

パピプペポ

是亦我國の語首ゐこれを用ゐば、音便合羽先非節婦出兵反哺等の時ゐ生ずるなり、

○數字

○これを零と称ず、字彙ゐ畸零ハ、凡數之零餘也とあり、略して令ゐ作る、

一二三四五六七八九十百千萬億

億ハ通例萬々をいふ又十万をいひ又百万をいひ又無數をいふ

○算用數字圖

方今、西洋各國ゐて、用ゐる所の數字ハ、其始亞剌比亜人ゐ起るといふ、而して其實ハ、印度地方ゐ創きる者なり、亞剌比亜より、伯巴

牙ヨ傳ヘ、それより、紀元九百九十九年ヨ、佛蘭西ヨ傳ヘしかふ、羅馬數字ヨ比それば、其字畫簡易ナルを、數計ヨ便なるを以て、遂ニ、各國ヨ播布せしなり、

0 即零なり、これを以て、一伐加へて十の數とし、二を加へて、百の數とす其他千萬十萬皆0を添へて成る、原名能的、

1 一なり温と称す

2 一なり都と称す

3 三なり替而衣と称す

4 四なり夫児と称す

5 五なり吠非と称す

6 六なり昔各斯と称す

7 七なり士文と称す

8 八なり噎的と称す

9 九なり乃恩と称す、乃恩以上10顛といふ、即十なり、

○羅瑪數字圖

羅甸の都府羅瑪ヨ行ハれし古文ヨ、其字

原ゝ僅ふ七字よ過ぎざりも、能く一切の數を錄をべし、所謂七字ハ、I V X L C D M是あり、これを參錯して象を成をり、然きども、今僅ふ印本時錄の符と為るのみ、

I（ユニウス）

II（ジュオ）

III（テレス）

IV（クワトオル）原IIIIは作れり後Xの上よIを加へて減數の契をん、下これふ同

V（クイング）即Xの半體Vの半を截りて五の符とせるなり

VI（セキス）

VII（セプテン）

VIII（オクト）

IX（ノーン）是十の中一を減して九の數とせるを示す

X（デニ）即十字なり

XI 即Xに半せるなり

XII 即Xに II（三）を加へたるなり

C（キンケ）Cの古文Ↄの符とせるなり

L（キンケ）Cの半即五十の符とせるなり

C（センタム）羅甸語百を取りて即百の符とせるなり

c n 七 u m ふりがなとせるなり

m（ミル）といふ其首字を取りて、千の符と為るなり、

D（キンケ）Mの古文Ↄの半體よりて千の半、即五百の符とせるなり、

M（ミル）羅甸語千を取りて千の符と為るなり、

○加算九々の圖

○乘算九々の圖

合數九々を尽くるを以て、凡べて九々と称ハ其始何の頃よりあるを知らん

○單語圖第一

○先言首の『いろは』を示を是ロ称或ハ誤らんことを恐れてあり

犬（イヌ）　狗類の総名なり、種類多し、有脊（イウセキ）肉動（ニクトウ）物に属す

絲（イト）　蚕絲、麻（アサ）綿線、并ひ称し細長き搓（ヨ）りなる物の総名とす

錨（イカリ）　原は碇と謂ふ、石を以て、舟を鎮定する具なりしを、後世銭にて作り、其状猫爪に似たり、故に銭猫と称す、後鐵にて作り、轉じて此字と為れり、銭の金に从ひ猫の字の犬を去るなり

㊀上に用ゐる井字を示す

井（ケタ）　泉を汲む所の名なり、其字構韓の四圍なる形に象れるなり、

豕（ブタ）　猪の子の義なり、俗にブタと称ふ、毛色白黒、及黒白雑きるあり、是有脊食草類、豊肌（ホウキ）動物に属す、

蝶螈（ヤモリ）　多く井泉に棲むを以て、井守の義なり、形は守宮（ヤモリ）に似て、背深黒、腹丹色なりて、尾扁（ヒラタ）く、止水（クマリミズ）のみに生ず、肥行動（ハカウトウフツ）物有尾の科なり、

㊀下に用ゐるイ字を示す

擢（カイ）　又かぢと称ふ、和字梶を用ゐる者是なり、

今の舵とハ別なり、櫓の材を以て造り、水を排け、舟を行る器なり、

燭臺 形狀種々ゟ作る、其始を知らず、蓋蠟燭の製、創りし後あらん、古ハ紙燭のみにて、手ゟ持ちて、暗を照しなるなり、

笄 原ハ男女共ゟ髮ゟ挿きて、別ゟ搔へを髮を搔上へなり、今の如く婦人の首飾となりしハ、元禄の頃より始るといふ、

㊀下ゟ用ひらひを示をイと混せんことを恐るれバなり

貝 貝ハ原宝貝より出て、介類の総名とす、宝貝を、今いふ子安ゲひろり、此類凡べて軟肉動物といふ、

盥 手洗の器より出で、衣類洗濯の器までをいふ、ものあれり、花柏扁柏等ゟて作り、竹箍を環らしたる者なり、

節 穀類藥材等を入れて振ひ疎を義なり、周圍を木ゟて造り、馬尾羅ゟて底を造る、又藤葛ゟて作るあり、又匣、中ゟ設けらるあり、

○下ゟ用ゆる井字を示ス

鳥居（トリヰ）○名義詳あらず、原ハ鷄を捿（スヘ）まし一樔（クヒ）なりといふ和名抄鷄栖ヨ作まり、今ハ一種の神門の如く、祠前ヨ植つるもとなれり

支那の華表とハ別なり、

莞（アトヰ）古名於保為（オホヰ）、又つくもと称ふ、池澤ヨ生ぜる草なり、六綱一目ヨ属を、葉燈心（ヰ）草の如くして、太く、夏月葉末或ハ差（ヤ）、下りを、傍ヨ數花を生ひるなり、薦草（サヽクスケ）の如し、刈り乾して、席ヨ織るべし、

紫陽花（アヂサヰ）又味（ヤ）藍の字を假用ゐ、又あづさゐ

ともいふ、五綱三目ヨ属もる攢木なり、夏初四瓣の淡青花、攢り開く、初黄白漸碧色ヨ變もるあり、淡紅ヨ變もるあり、紫陽花ハ原紫花木犀（モクセイ）の名ヨして、白氏長慶集ヨ出づ、蓋四瓣紫色より、假借せし字なるべし、

蝦（エビ）士俗ヨ海老の字を用ゐ慣れさり、今繪く所の者ハ、龍蝦（イセエビ）なり、又草蝦（テナガエビ）斑節（クルマエビ）蝦等あり、并ヨ、無脊の多節動物ヨ属して、是を中殼類と稱ス、

枝（エダ）草木ヨ拘らず、又ありて、莖幹より分レ出で

うる部をいふ、又之とめくも称ひ

榎（エノキ）　本字ハ朴といふ、喬木名なり、蓋し初夏ヨ至りて、萌芽をる戔以て、榎字を設けしるべし、葉香ヨ似て、縦ホ紋脉（スヂ）多く、先ヨ鋸歯（ノコギリバ）あり、夏月青白五瓣の細花を開き、五雄蕋二雌蕋ヨて、五綱一目ヨ属せ、後ホ圓實を結ぶ、

○上ヨ用ゐる工を示ひ

繪馬（エマ）　古ヨ板立馬（イタタテウマ）、又馬形（ウマカタ）といふ、繪馬も亦古語ヨて、本朝文粹ヨ、大江匡衡ヶ菅廟ヨ奉りしこと見えたり、馬を神前ヨ奉らくと能

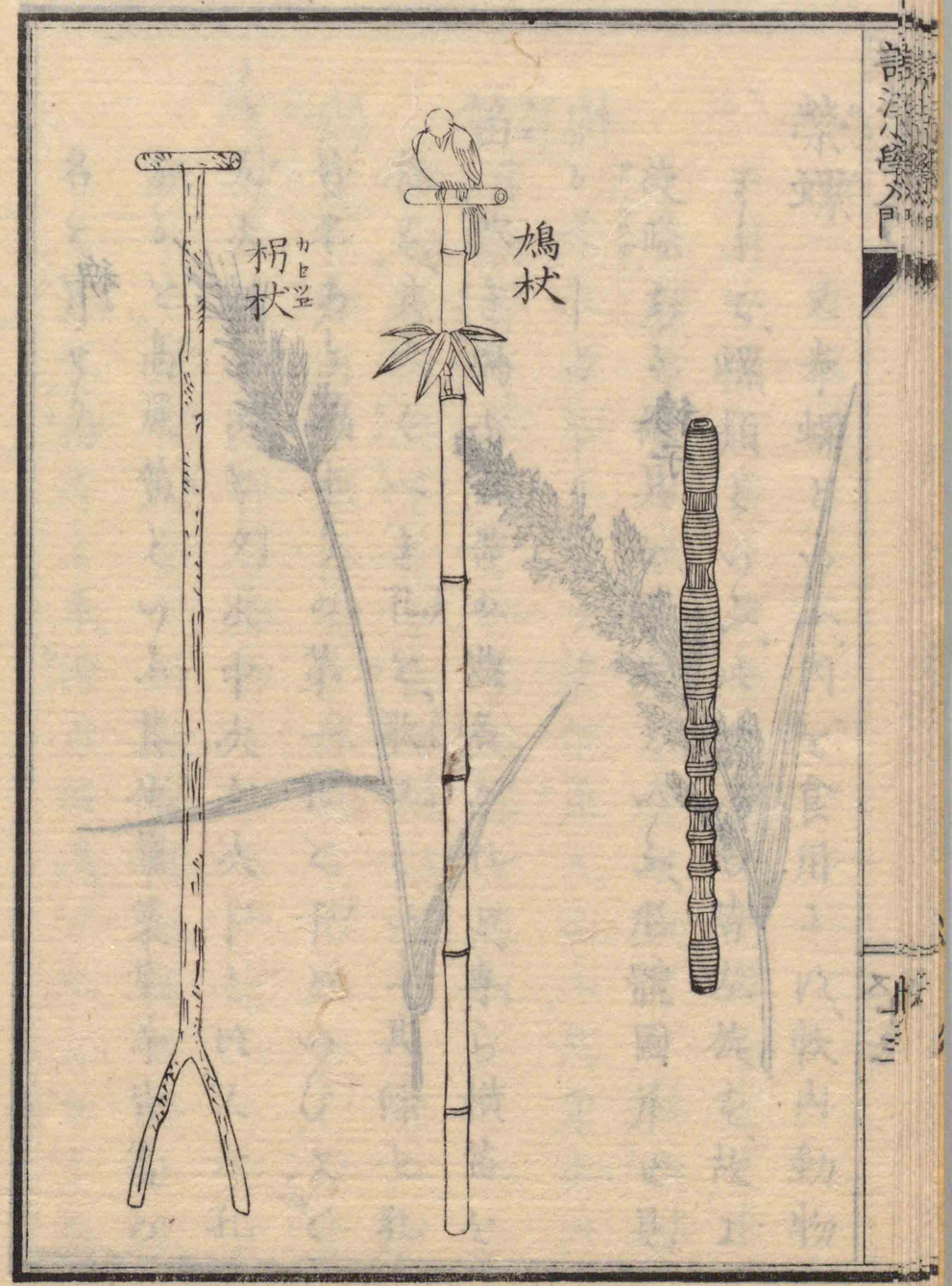
たさる者、換（カフ）るヨ木刻（ボリ）或画馬を以てせし遺風なり、後世流きて倡妓俳優の圖を掲くるヨ至るハ、褻神の非禮といふべし、

繪具（エノグ）　我國の顔料（エノグ）多く植物より成きり、殼青（アヰ）、鴨跖草花（ハノクチナシ）、梔子（クチナシ）、棠梨（ズキ）、黄柏（キハダ）、臙脂（ベニ）等是なり、只定粉（ノツチ）、緑青（ロクセウ）、代赭（タイシヤ）石、雲母（キラ）等礦物ヨ属ひ、

槐（エンジュ）　木の名なり、古ヨ惠尒須（エニス）といふ、其葉排列（ハイレツ）して、藤の葉の如く、夏末穂を成して、蛾形（ガケイ）狀の花を開く、黄白色、十雄蕋一雌蕋ヨて、十綱一目ヨ属す、

榮螺（サエ）　又拳螺といふ、肉を食用とす、軟肉動物として、螺類といふ、此類の殼、皆左旋を、故に旋條（マキスジ）ある器具を、螺旋（ネヂ）といふ、形體圖并せ見るべし

笛（フエ）　吹き鳴らす器の惣名なれど、專ら横笛を称す、其吹くべき孔（アナ）を、歌口（ウタクチ）といふ、其餘七孔皆名あり端（ハシ）よりの第一孔を干（カン）といひ次を五次（ゴジ）を上次（ジヤウジ）次を夕次（ザツ）次中次六次下とす又六孔あるを高麗笛（コマフエ）といふ其他篳篥笙等皆笛の名を胃（オカ）せり



稗（ヒエ）野びえ草びえといふ、多く路傍に生じ、其穂、狗尾草（エノコロクサ）の如くして、芒（ノギ）あるいり、芒なきあり、又邊鄙にて、食用ふるる穄子（ヒエ）は、田びえ、畠びえ等あり、其穂黍（キビ）の如く細よりて、これとて別なり、

○下ふ用ゐるへを示ふ

鼎（カナヘ）金鍋（カナベ）の義なれども、音便カナヘと唱ふ、あしらあべの略なり、工と混ずるをいてらふ舉けるあり、此字即其形ふ象れり、古食物を煮たる器にして、今の纔ふ、香爐等ふ形

を存す、

家（イヘ）　人の住居（ナウキヨ）する所の総名なり、其字原は豕（ブタ）の圈（ニハコ）なりしを、人の居は假借せしなりといふ、

苗（ナヘ）　植物初生の総名なり、其原は田に生ずる草の名なりしを、即五穀をいへるなり、字動（ヤ）もすれば苗（テヒ）は混ず、苗は稙（シウ）なれば別物なり、

㊀下に用ゐる工を示す

鞆繪（トモエ）　鞆（トモ）は古、射（ユミイ）るとき、左手に着けし具なり、其器に繪きしなり文字なりしの故に、鞆繪といふ、古

より、水紋なりきつひ、又三火の形なりともいふ、原由詳ならず、

杖（ツエ）　手に柱（サヘ）して、身體を支（サヘ）ふる枝をいふ、竹木種々の物を以て造る、是上、音ッよりして、其韵（ヒキ）に觸れて、自（ラウ）工の音を生ず、次の机亦是に同し、但し笛は吹き枝の義なれど、此と同じからず、

机（ツクエ）　我國の几に原食物を排列する器なり、後世轉じて、文書等を寫す器の名となれる歟、西洋にいふタイブル、又テーブル、亦飡倬（ソウタク）の

名なり、我國の如く、今を文房の称とされり、

○單語圖第二

○下は用ゐるワを示す

慈姑（クワイ） 水草なり、其葉三稜、其花三瓣にして、白色、形状凡べて、野茨菰（オモダカ）の如くにして、肥大なり、其根は䰞ありて、これを食用とし、花一株は、雌雄を具するを以て、廿八綱八目の草とす、

繰（クリ） 假借字なり、本名ハ衒（ケナワ）といふ、口輪の義なり、馬の口中に含ませめて、御するを見なり、古

名を、くつばゝと称ふ、

鰯（イワシ） 我國の製造字なり、漢字を鰮あり、此魚輭脆（ヤワラカ）なるを以て、弱（ヨワ）は以ふなり、いとも即弱（ヨワ）の轉語なり、海魚にして、伊豫の字和は産なる者、古より名あり、凡べて魚類を冷血動物とし、下これは倣へ、

○下は用ゐるハを示す

瓦（カハラ） 泥土にて作り、窯（カマ）に入れて、薫（フ）すべ、燒き作り、屋（ヤネ）を覆ふ具なり、崇峻天皇元年、造寺工、瓦工等、始めて百濟より来り造る、其制佛寺は

創まり、仍りて寺は、瓦葺の称あり、

槲（カシハ） 我國古は、此葉は食物を盛りさ、此支隋書にもつくり、因りて炊葉（カシキハ）といひしが、轉ぜしありといふ、世一綱八目の喬木にして、夏月枝間に穂を垂れ、栗に似たる花開きて實を結ふ、櫧子（カシノミ）に似たり、

鍬（クハ） 土を堀り起す器あり、其尖（サキ）鋒を以て造る、又全く鋒にして、木柄を加へたるを、唐ぐはといふ、樹木を堀るに供す、

○上は用ゐる才を示す

帶（オビ） 衣を束ぬる條（ヒモ）類の総名なり、古の石帶、今のバンド、形状各異ありといへども、皆帶に属せり、

狼（オホカミ） 豺（ヤマイヌ）類の啖肉動物にして、山に棲む、然れども、食を求めて、或は村里に出で、往々人を害す、形犬より大にして喙（クチバシ）長く耳小に、脚に蹼（ミヅカキ）ありて、能く水を渉る、

織物（オリモノ） 布帛の総名あれども、多く機（タカバタ）にて織る、文章ある者の名とす、

○上は用ゐるヲを示す

鶩（ヨル）　古来假借して此字を通用せ、雄ハ頭と紫毛有りて美しく、尾と所謂劍羽（ツルギ）あり、雌を灰黒色にして腹白く、冠及劍羽なし、文那ハ、鸂鶒、又紫鶩鴨と謂ふ、家に養ハきるを、冬来り夏去ると、鳧、雁の如し、此類皆蹼（ミヅカキ）あるを以て、掌形（レヤウケイ）足鳥といふ、

折本（ヨリホン）　摺（ダ）らざる書をいふ、習字の法帖、此制なるに倣ひて、俗に又手本といふ、此他枝を折る骨を折る等、皆ヨルといふ、と伝見（ツタヘミ）たり、

㊀下に用ひるヨを示せ

竿（サヲ）　釣竿舟棹に拘らず、長き木竹の称なり、

魚（ウヲ）　又轉じていをと云ふ、上音うに接して、自ヲの本音を見るべし、考へ見るべし、

芭蕉（ハセヲ）　蕭韵の字、其韵をヲに轉ずるハ、古韵の常なり、襖子（アヲシ）のヲも如し、此草暖國の産なり、葉長大にして青く、暖國にあらずとも、花梯に開く、故に謬りて優曇花（ウドンケヱ）といふ、花黄白色にして大なり、荷花（ハス）の如く、數十瓣重なれり、雌雄花又雌雄両全花ありて、二十三綱一目の植物なり、

○下ニ用ヰル ホを示す

顔（カオ） 顔ハ、原（ト）眉目の間ニ名あり、後轉して、全面の總名なり、猶顔（アタマ）ハ顙門（ヒヨメキ）の名なるを、首の総名と為れるが如し

酸漿（ホヽヅキ） 葉揩圓にして、粗鋸齒（アラキキサミ）あり、花五尖にして、五雄一雌蕋あり、古より實の内𤇆を去りて、小兒の翫物とす、其種類千ナリホヽヅキ、櫻珞ホヽヅキ等あり、弁ニ五綱一目の植物なり

牽牛花（アサガホ） 葉形、常種ニ三椏（ミツマタ）ありといへども、變

して、五椏、七椏の者あり、花形も、漏斗（ジヤウゴ）形と常ニまさといへども、又孔雀乱菊風鈴（クジヤクランキクフウリン）等の異あり、培養（ウエカタ）の巧ニ因りて、愈新花を出さといへども、畢竟五雄一雌蕋ニして、五綱一目ニ属ス

○下、ホ用ヰるジと示ス

雉（キジ） 本名ハ、きゞし、又きゞしといふ、鷄属の禽なり、雄ハ頂紅にして、耳邊ニも時々紅肉をあらハし、腰ニ長緑毛ありて、文采美なり、雌ハ冠（トサカ）なく、尾短くして美ならず、

虹（ニジ） 大陽の影、大氣中の水氣ニ映して、見ハ

所なり、故に朝は西に見え、夕には東に見ゆ、其色、紅、橙黄(カウジイロ)、黄、緑、青、紺、紫、の七色を見もいること三角硝子と透映をる日光に同しくして其次序を變せり

富士の山(フジノヤマ)　又不二、不盡等の字を假借を、其山甲斐駿河、伊豆の三國に跨がりて、積雪四時に絶えず、我國最第一の高山なり、其高さ、諸家の測量同しからば、千四百十七丈といふ、又一万二千尺なりといふ、古八噴火山なりしが、中世より熄(ヤミ)しを以て、登臨をる者多し、

○下に用ゐるヂを示ス

紅葉(モミヂ)　霜に遇ひて、紅色になれる樹の捻名なり、然れども、後世械(カイ)の別名の如くなれり、械樹(カイテ)ハ、品類夥しと雖へども、皆二十三綱一目の植物にして雄花、雌花、雌雄両全花、并に一株に開く者なり、本名ハ蝦手(カヘルテ)といふ、

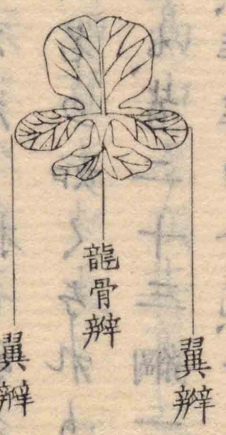
鰺(アヂ)　又鯵に作る、狀青花魚(サバ)の如くして小く、脆き尾に至りて、一隊の硬鱗屈曲(コハキウロニ)して連まり、俗にこれをゼイゴといふ、後世、漢名にれによりて、竹筴(チクサク)魚といふ、鹹水産の冷血動

物なり

藤(フヂ)の花花淡紫なるも常あり、一種白花の者は、茎葉差細小なり、白ぢと称ふ、十七綱三目ヨ属ー、十雄一雌蕋あり、此類の花を、蛾形(ガサ)花(ギ)と謂ふ、合せて四瓣あれども、瓣毎ヨ其名を異ヨ、

下圖の如ー其他

皆これ ふ倣へ



○下ヨ用ゐるズを示ス

雀(スメ)其鳥聲小鈴ヨ似たるら故ヨ、鈴女の義ヨ

りといふ、女ハ、古多く鳥類ヨ添へていふ語

あり形状を、人の多く識れる所なり、是有脊

動物鳥類の一目ヨて、其類多ー、

鼠(ネズミ)是亦、形状、人の識れる所あり、其種類多ー、

此類これを、噛(カッシ)歯動物といふ、鑿状の門歯を

有ーて、食物を受用もる者の稱なり、

鈴(スヾ)本書圖をる所ハ、鍮石(シンチウ)ヨて作れも、方今神

祠前の鈴なり、古鈴ヨを、其形一ならズ、ーて、皆

鑄(イ)成ーさる者なり、

○下ニ用ヰるヅを示ス

鶉（ウヅラ）　形鷄雛の如く、全身褐色（チャイロ）ニて、黑白の斑（マダラ）文あり、其斑（ヒヨコ）ふきを、鶉（ヒヨコウヅラ）といふ、脚短きハ雄ニ、尾（タヲ）、差（サ）長きを雌ニ、是有脊動物、鳥類、鷄の目ニ属せり、

鯰（ナマヅ）　淡水産（マミ）の、冷血動物ニて、全身青黑、形圖ハ如ク、即鯰魚ニ、鯰字ハ雀禹錫食經の字ニ、和字ニ非ラず、

水呑（ミヅノミ）　制作ニ拘らず水を飲む器の惣名ニ、水の訓、ミヅニ、記セしめんが為ニ、此ニ

挙（ケ）ゝるあり、

○單語圖第三

○庶物の名、形状、文字を知らしむ

桃（モモ）　花を賞ニ、緋桃（ヒモモ）碧桃（ヘキタウ）あり、實を食ふニ、光桃（ツバイモモ）、秋桃（アキ）あり、我邦ニ、桃栗三年柿八年と云（ヒ）、支那ニ、桃三李四梅子十二といふ、皆植ゑてより、早く實ニ因りて、起れる諺あり、十二綱一目、多雄一雌ニ属ス、

栗（クリ）　實の形大ニ、板栗（テウクリ）といひ、至て小きを、茅栗（ンバクリ）といふ、其花梅雨中ニ開く、穂を為ス、

と三四寸、黄白色の細花、攢り開く、雄花も雄蕋のみ、雌花も雌蕋ばかりなれども、一株に兼ねたり、二十綱八目、多雄蕋の属なり、

梨（ナシ）　花桃に次きて開く、白くして五辨、多雄蕋五雌蕋十二綱四目に属す、乳梨（ニガナシ）、青梨（アヲナシ）等、種類多し、

柿（カキ）　字柿に作るも非なり、柿は林と同じく、削れる木片（コッパ）の名なり、正は柿に作るべし、葉實八人の識る所なり、其花春末開く、尖（サキ）四裂して三分許、火黄色（ウスアカキ）なり、一株に雄花、雌雄両全

花を開く、二十綱二目に属す、

林檎（リムゴ）　りむごは、字音の轉にして、古ふるゝごとつふ、花は海棠の如く、白くして處々淡紅を帶ぶ、梨と同綱目の果樹なり、

蜜柑（ミカム）　原は、柑の味甘くして、上品なる者の稱あり、橘（クヂンボ）、香橙（タイイウ）、臭橙（イヒ）、柚（ユ）、金柑（キムカム）等、皆此類なり、夏初五辨の白花あり、二十の雄蕋上分れて下合へり、其葉冬凋まず、并に十八綱二目に属す、我國に、橘の渡りしは、古しと雖も、柑は養老神亀の頃、播磨、直弟兄（アノヘオトエ）、始めて種を支那より

傳へしと、續日本紀に見えたり、

石榴（サグロ） 花を賞でる浅花石榴（ハナサクロ）といひ、實を食ふを、果石榴（テウセンザクロ）といふ、又火石榴あり、高さ尺に盈たずして、能く花あり、多雄一雌蕋にて十二綱一日の樹なり、

葡萄（ブドウ） 淡緑にして、透明なるを緑葡萄といひ、熟して白きを、白葡萄といふ、常の淡紫なるハ、即紫葡萄なり、并に春細花を開き實を結ぶ、五雄一雌蕋にて、五綱一日に属し、

枇杷（ビハ） 古にミハといふ、冬月五瓣の白花を開き、多雄蕋五雌蕋なり、其實梅雨の頃熟し、十二綱四日に属し、

稲（イネ） 粳（ウルシネ）あり、粳ハ飯に炊き、糯（モチ）を造る、糯ハ餈（モチ）に作る、其花六雄蕋にて、二雌蕋なり、六綱二日に属し、

茄子（ナスビ） 俗に偏稱（カタナ）にて、なんとも、中世の婦人言にて、大上鵜名、事に見えたり、常の茄子も、其花も紫なれと、青茄ハ其花白く、實細く長きを水茄（ナカナス）といふ、並に六瓣、五雄蕋一雌蕋の花にて、第五綱一日に属し、

大角豆（サヽゲ） 漢名豇豆（コウ）とつふ、豆を食ふ者を、みづらさゝげといふ、其莢長き者を、十六粒豆（ジヤウロクサヽゲ）といふ、莢（サヤ）を連絡（ツヾ）て菜蔬とす、其花蛾形（ガケイ）にして、一雌十雄蕋なり、十七綱三目に属す、

胡瓜（キウリ） 熟して黄ばむを以て、和漢ともに黄瓜の名あり、花五瓣にして黄ばむ、一株に雌雄花を異にす、此他南瓜（カボチヤ）西瓜（スイクワ）、越瓜（シロウリ）等も、皆謬花（ムタ）を生ず、是雄花にして、雄蕋輪様を為す、これ伐取り除くれば、雌花も實を結ぶべ、凡て廿一綱十目に属す、

南瓜（ナンクワ） 圖の如きを、東京にて唐茄と称し、形壺の如き伐、かぼちやといふ、西京にてこれに反す、

西瓜（スイクワ） 瓤（ナカワ）色赤き伐常とす皮白きを月明瓜（シロスイクワ）といふ、瓤淡黄にして子赤し、

筍（タケノコ） 又たけのむあるといふ、竹芽菜（タカノナ）也義なり、淡竹（ハチク）苦竹（マタケ）并に食ふべし、其最早く發（イツ）る伐、江南竹（モウソウ）といふ、

蓴（キノコ） 又くさびらともいふ、松蓴（マツタケ）青頭菌（ハツタケ）王蓴（シメジ）等種類多し、葉莖ある、花實なくして、生ずるも如

りとゝ、どゝ、其實ハ、内眼ゝを見る事能ハ
ざるゆゑ、近来培養の法ありて、能くこれ栽
栽ゝ、特ゝ朴樹椎樹の、蕈を生ずるゆゑゝ
らび、此類二十四綱四目ゝ属ゝ、殖機見難
き者とゝ

蘿蔔（ダイコン） 古ゝ大根（オホネ）と称せりゝ、今轉ゝ字音ゝ
て通ゝ、春月莖を抽て、四瓣の花、攢り開く、淡
紫、或白色、一雌蕋六雄蕋、四ハ長く、二ハ短く、
長き蒴（サヤ）を結ぶ、此類十五綱二目ゝ属ゝ、

胡蘿蔔（ニンジン） せりゝ、ぎむ、ふうゝ、ぢむ、けくゝ、ふゝ
ゝむ等の名あるを、畧ゝを呼ひ慣れゝるお
て、人参ゝを大ゝ別あり、種名ゝより二年ゝ
ゝて、莖を抽て五瓣の小白花攢り開き、纖（カヤ）の
如ゝ、皆芹の類ゝ、其蕋五雄二雌ゝり、五
綱二目ゝ属ゝ、

蕪（カブラ） 根形扁ゝきあり、長きあり、俗ゝ畧ゝて、か
ぶゝ稱ふ、共ゝ十五綱二目ゝ属を、

蓮根（レンコン） 蓮ハ、原其實の名ゝて、葉を荷（ハス）といひ、
花を蓮（ハチス）といひ、根を藕（ハスノネ）ゝいふ一雌多雄蕋

薑（ヒヤウガ） 古名を、はゞゝみといふ、齒（ハ）蹙（ヅ）れ義なり、中古より、生薑の音を轉じて、しやうがと称ふ、花を稀なりといへども、一雌一雄蕋ありて、一綱一目に属せり、

芋（イモ） 紫芋（タウノイモ、ヤツガシラ）、八面芋等あれども、單称なるハ青芋（サト）なり、栽ゑて久しきを經れば、是亦花を生ず、形半夏海芋（ミツハセヲ）の如くして、多雄蕋雌蕋を帶ぶる者あり、二十綱七目に属し、

牛蒡（ゴバウ） 古名うまふぶき、又きたきはといふ、近古うに、音を以て称し、遂に牛房の字を用ゐるに至る、十九綱一目に属し、雌雄両全れ小花、均しく攢り開く、

葱（ネギ） 本名ハきとのくいふ、故にひともしと称ひ、中古の婦人言ふ、根を賞するを以て、俗に根葱（ネキ）といふ、漢葱（カリキ）、麦葱（アサツキ）、冬葱（フユキ）等の類あり、六綱一目の草なり、一雄六雌蕋を具ひ、

○單語圖第四

○先（ツ）何處の人家にも在らざるなく、早近しく常に目に觸るゝ所の者より示そ

竈（カマド） 又へつひ、くどとも云ふ、并に古名あり、釜鍋を安（オ）きて、飲食を造る處の名なり、今へつひとも云ふハ音便なり、

釜（カマ） 飯を煮る器の名なり、銑にて鑄（イ）、又紫銅鍮（カラカネ レン）にて作る、此字原ハ鬴に作る、畧して今の字となれるなり、

茶釜（チャガマ） 原と茶を煮る器なり、形大に湯多きが故に、茶味を失ふを以て、方今ハ徒（タ）湯を煮る者多し、茶人用ひる所の釜ハ、形狀大に殊にして、制作精巧、蘆屋の産、名越氏の作等、名目

夥し、

銚瓶（テッビン） 湯を煮る器なり、銑にて製れるを銚瓶といふ、銅にて作れるを、藥鑵（ヤクカン）といふ、

土瓶（ドビン） 亦湯を煖（ダン）し、茶を煮る器なり、瓶字濁る者ハ、東京の辞なり、關西にハ、清音にて唱ふ是偎褻の嫌を避る故とぞ、

鍋（ナベ） 魚肉菜蔬等を煮る器なり、亦種々の礦屬にて作る、陶器なるを土鍋（ド ナベ）といふ、

樽（タル） 酒漿を貯ふる木器なり、酒酢ハ三斗五升を一樽とし、醤油ハ七升五合を一樽とぞ、此

宇原鑄ゝ作りしを、後世今の字ゝ作る、

升（マス）　原ハ、一升を容るへき器にして、物を量る為ゝ作きるなり、猶一斗を容るへき器を斗と称するゝ如し、其寸法沿革あれども、今の一升ハ内四寸九分四方にして、深さ二寸七分あり、一斗容るへきを斗（トマス）升と称へ、一合容るへきを一合（イチガフ）升と稱へ、量器の総名とあれり、

火鉢（ヒバチ）　古ゝ火桶、そびつあど云ふ、炭火を熾（オコ）し置く器の名なり、○鉢の義後ゝ見えたり

膳（セン）　即足打（ハシウチ）析敷（ヲリシキ）なり、膳ハ原、具食の名にして、器の名ゝあらず、轉じて食卓の称とあれるなり、

椀茶碗（ワンチヤワン）　此字數體あれども、盌を正とす碗ハ和字にして、白堊ゝて作れるをいふ、其意俗ゝ、石焼と稱するゝ同じ、又鋺ゝ作る、靈異記ゝ金鋺（カナマリ）あり、字ハ漢字なれど、其義異あり、又埡ゝ作るあり、是ハ漢字あり、又磁ゝ作る饅頭屋本節用集　此ゝ碗ゝ作るも其石ゝ従ふ和字を示さんが為なり、新撰類聚往来等ゝ見えた

る呼りて、近来の俗訛なあるべし、

皿鉢（サラハチ）　さらを、さらけの畧あり、平扁なるをいふ、鉢を原佛家の食器の名りて、其邊（ヘリ）深きをいふ、

徳利（トクリ）　何の義なるを詳ならず、酒漿藥水等を盛る、細頸なる瓶の稱なり、支那人壜といふ者是なり、

鍾杯（チョウクリカツキ）　鍾を、俗に猪口の字を用ゐる、是あり、磬（ツボ）知なる器の惣名とれ、チョウクも、原鍾字の古音レユクに訛りて、猪の口に似たる義なり

非ず、杯ハ原酒器の名なりて、今用ゐる木製髹（ウルシ）漆（ヌリ）の者に限るに非ず、

壺（ツボ）　飲食及諸藥物を實（イレ）る器なり、此字を即其形に象（カタト）れるなり、

庖刀（ハウチヤウ）　庖丁刀の略なり、出齒、菜切、指身庖刀等の別ありて、形を異にれど、出齒ハ、和泉堺に鍛（カ）工（チ）ありて善く庖刀を造る、其人の齒外に見たるを以て、出齒の庖刀と稱せしが遂に刀名となれるなり、然れども、四條流庖丁の用ゐる刀ら、上下同幅にして小く、柄を纏ふ

ふ華を以ても、

箱（バコ） 原も竹あミ作りる器をれど、轉しく、木製匣類の名とあれるをり、其製即籠蓋（フタ）、挿蓋（フタ）、慳貪蓋等の目あり、慳貪ハ麪條（ウドン）を納るり厨（ニハ）ふ出さる名をり、

柄杓（ヒレヤク） 類聚往来柄杓ふ作り、下學集柄酌ふ作る、并ふ借字をり、其始瓢（ヒサゴ）を乾し、刳（エ）りて水を汲ミしを以て、ひさごといふ、後世竹木りを作りをも、猶舊名を用ひ、遂ふ訛りて、ひしやくといひ、今此字を充てり、通用せりあり、

手桶（テヲケ） 水を汲ミて、攜（タヅサ）ふる器りて、手ふ提くる況以て、又提桶の字を以て通ぜ、

籃（カゴ） 竹りて組（クム）る器りて、筍笊（イカキサル）等の屬あり、古ふ所謂堅間（カタマ）の類ふして、後ふこれを、うとミといひ、筐字を充てり、用ひ来れり、

釣瓶（ツルベ） 井水を、汲（クム）ミ上（ア）る器をり、滑車（ロクロ）りて牽くあり、竿りて上をるあり、支那ふて、古瓦ふて作り、瓶とのミいひしを、後ふも木ふて作り、吊桶といふ、今此字を用ひる者多し、

○單語圖第五

前は同じ

本（ホン）　中古ふ物の本といふ凡べて書籍の、傳たれる本様ふ仍りて、書寫し、甲本、乙本と稱へしより、遂に縫綴（モトヅカタ）せる書籍の、総名とあるべし、

筆（フデ）　書手（フミテ）の轉なり、因てふんでの稱あり、和筆は夏毛冬毛の別あり、鹿毛もて作るをいふ、我國古は、多く鹿もて作る、万葉集に見えたり、延喜式みは又兎狸みて作れることをいふ、方今は狸毛馬毛黄鼠（テン）毛もて作り、舶来の羊毛もて製す、

墨（スミ）　隃麋（シュビ）の音轉なりといふは、誤まり、墨のもあらば炭よも呼ぶを以て考ふれば、黒き物の稱なるべし、大和の奈良、近江の武佐、古よりこれを造る、其他方今有名の者多し、推古天皇十八年、高麗より僧曇徴（トンチョウ）を貢る、此人能く紙墨等を作るといふ、蓋其頃より製造精しくなれるあらん、

紙（カミ）　楮（カウゾ）の皮を剥き、蒸して麤（アラ）皮を去り、細く擊ち碎（クタ）き、黄蜀葵（トロ）根汁を和し、細竹簾もて抄（ス）き、

板ニ貼リ乾カセ、板ニ著ケル處、平ナルヲ以テ表トス、又結香蕊花ニテモ造ル、

硯（スズリ）　古ハ、我國多ク瓦硯ヲ用ヰシナリ、中古ヨリ、石王寺雨畠（アメハタ）、高島（タカシマ）赤間（マ）等漸ニ之レヲ出セリ、

簞笥（タンス）　衣服ヲ納ル、抽匣（ヒキタシ）ある匣（ハコ）ノ総名ナリ、又茶簞笥、菓子簞笥ナドあり、此字義ニ乖（ソム）クガ如トモ雖、説文ニ簞ハ笥也、又笥ハ飯衣之器也、トいヘバ、竹木ノ別アレド、是亦協ヘルナリ、

椅子（イス）　原ハ倚子（イシ）ニ作ル、後世椅字ヲ假リ用ヰタリ、椅（イヒキリ）ハ原来、木ノ名ナレド、梓ノ属ナリ、

鏡（カガミ）　我國ノ古ハ、銹鏡ナレド中古ハ白銅鏡ノ字ヲ以テ、キラ〳〵ウ〳〵ミヲ充ツ、蓋シ支那古銅鏡ノ劑（アハセカタ）ニテ、銅錫半セル者ナルベシ、

剪刀（ハサミ）　又鋏字ヲ用ヰル者ハ、両刃ヲ交ヘテ、紙帛ヲ剪ル意ナリ、然レドモ其字釘鋏ニ同ドキヲ以テ、混セラレ、ヤヽモスレバ、

琴（コト）、原々宮（キウ）、商（シヤウ）、角（カク）、徵（チウ）、羽（ウ）、文（ブン）、武（ブ）の七絃の琴ニテ、柱ヲ、後世轉ジテ箏類の総名トナレリ、箏モ、一二ヨリ九十ヨリ、数ヲ称ヘ、十十十二十三の絃ヲ斗為巾（トイキン）トいフ、

大鼓（タイコ）　革を張りて、撃ち鳴らす器を、総べて鼓（ツヅミ）といふ、其大なる者の称あり、然れども名を腰鼓（ツヅミ）と奪されて、今を小なるをも、総べて大鼓といふ、

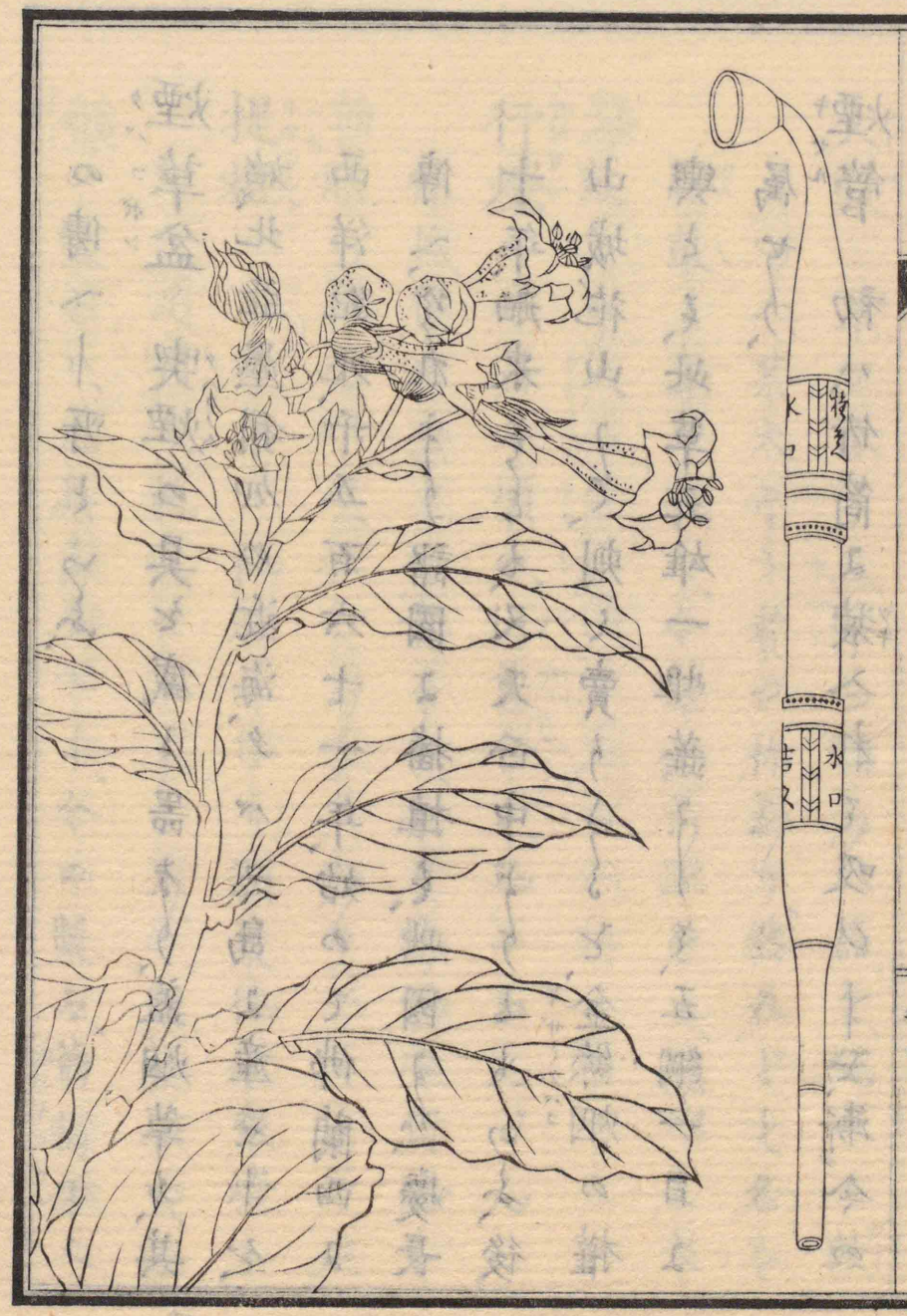
行燈（アンドン）　永昌の頃の、何曽（ナガアヘ）合ふ、已ふあんどんと称ひ、後世の支那音なり、原を携へて行路を照らすを以て、此名あり、

提燈（チヤウチン）　下學集に挑燈を作り、類聚往来張燈ふ作る、足利氏執政の末よりあり、然れども、今の製といひ、差異あるべし、今の製を、葡萄牙人（ホルトガル）

の傳へ、一所といふ、

煙草盆（クバコボン）　喫煙（タバコ）の具を盛る器なり、蓋烟草を、其始め北亞墨利加の近海、タバコ島に産せしを、西洋紀元、千五百六十一年、始めて佛蘭西に傳へ、それより諸國に播植せ、此國より、慶長十年、舶来せしも、又天正中よりともいふ、後山城花山にて、刺く賣りしを、金絲烟（キザミタバコ）の權輿とす、此草五雄一雌蕋にして、五綱一日に属せり、

煙管（キセル）　初ハ、竹筒に装入（ツキ）れて吸ひしを、漸く今の



如くなれるあり、今の製を、近江水口の人、水口權兵衛吉久より始まるといふ、

團扇（ウチハ） 大和奈良、西京深草の產、其名高く、近来舶載の蒲葵（ホキ）扇多く、是蒲葵（ヒラウハ）葉を以て、造るあり、

算盤（ソロバン） 今多く用ゆる者は、支那元の時より製るりといふ、我邦より傳はりしを、何時ありしを知らず、其前は總て、筭木を用ゆるのみ、其時計（トケイ）を以て、漏刻（ロウコク）を用ゆるのみ、其時計を以てすること始詳ならざ、是亦元和天正の頃あるを

べし、支那ハ時辰表といひ、又鍾字を通用ひ其聲ある者を、自鳴鐘といふ、短針ハ晝夜の十二時をさし、長針を一時中の六十分を指し秒を一分中の六十秒を指す

磁石 磁石ハ、一礦物の名なるを、轉して其石を、磨り着たる針の名とふれり、本名ハ磁針、和製を、周天を百二十ハ分ち、十二支ハ配ひ、洋製を、四方并北西、南東、北東、南西、ハ分ち三十二とハ

寒暖計 玻璃管ハ、汞を實れて製ひ、瑞典攝修氏を、百度ハ分ち、佛朗西人列奴氏ハ、八十度とし、普魯士人華聯係多氏ハ、二百十二度を、ハ定む、攝列二氏の零度、花氏の三十二度を、凍点氷点とし、攝氏の百度、列氏の八十度、華氏の二百十二度を、沸湯点とひ

傘笠 雨を防ぎ、日を障ふる具にて、翳ひ者を傘とし、被る者を笠とひ、

下駄 古ハあしだといふ今を雨中ハ用ふる、齒高き者の称とすれり、

雪踏 千利休の發明にて、草履ハ革を貼し

原靴改正履ニ作ル

堂中、茶室ニ通ふ、路次ヲ、踏むニ、便せしあり

履（クツ）　方今用ひる所の洋製の履をいふ、古昔朝

服ニ著せし履とハ別あり、

○單語圖第六

著物（キモノ）　衣服（イフク）の總名（ソウメイ）ふり、然きども、別けてハ

そゝぐ、專ら等身の衣の称とハ

羽織（ハオリ）　義詳ならず、古の道服（ダウブク）ありといふ、

單物（ヒトヘモノ）浴衣（ユカタ）　綿布（メンフ）、縐紗（チリメン）等ニて、裁し、單ある者を

單物と称ハ、苧麻（カラムシ）、大麻（アサ）、及んての生絲ニて、織

たゝ者の單衣ニて衫（カタビラ）といふ浴衣ハ浴して後

身を拭ふ單衣の名あり

袴（ハカマ）　脛上の衣ニして、闊窄（ヒロキセマキ）ニ拘ハらざ、支那の

袴ハ、俗ニいふパッチの類ニして、洋服のズ

ボンと稱する者と、共ニ皆此属あり、

上衣（ジヤウイ）　上部ニ著する衣なり、西洋ニこれを口

ツクと稱ハ、俗ニマンテルと称すれども、マ

ンテルハ、衣上を覆ふ外套の名ニして、これ

と同しうらハ、

襦袢（ジユバン）　汗衫（アセトリ）をいふ、又肌着（ハダギ）と称ス、然きども、古

の汗衫（カサミ）とハ別なり、混ぞべからハ、

夜具（ヤグ）　寝ぬる時の具にして、被褥（ヨキフトン）を、併せいふ
稱なり、
帽（ボウ）　圖なる所ハ、方今禮服の帽なり、帽を、頭に
被ぶる服の、総名あり、俗にシャップといふ、
ち、洋語キャップの轉訛にして、日常の帽と
ハ別あり、
頭巾（ヅキン）　冠りて、寒を防く為の具にして、炮烙（ホウロク）、山
岡（ヤマヲカ）、船底（フナゾコ）等の、俗称ありて、各形を異にす、
手拭（テヌグヒ）　古名たのごひといふ、浴醟（ユアミカホアラヒ）等に用ゐる
布の巾なり、支那にて悦又手巾といふ、

手袋（テブクロ）　古製も亦莫大小（メリヤス）にて作る、護謨（ゴム）を以て
伸縮せしむるハ、西洋の製なり、
股引（モヽヒキ）　袴裏に着する服なりて、亦莫大小にて、
作る、勞役を服する者の股引を、藍棉布（アラレノト）にて
作る、又絹にて造れるを、パッチと稱す、何の
義あるを知らず、
短胴服（タンドウフク）　禮服の下に着る、袖ふき衣なり、俗に
チョッキといふ、其義詳あらず、
足袋（タビ）　古の踏皮（タフビ）の音なり、然れども、踏皮ハ指
を分ちて、今ハ履下（クツシタ）といふ者の如し、指を

分けうるを、亦葡萄牙人の製ありといふ、

顔（カホ） 前を注ぐ

頭（カシラ） 領（エリ）以上の総名なり

目（メ） 視感を受る所の総名なり

耳（ミミ） 聴感を受る所の総名なり

鼻（ハナ） 嗅感を受る所の総名なり

口（クチ） 味感を受け又言語を發する部なり、二用を兼ねて、只一箇あるも、言語飲食の多かるべからざる為なりと、いふ語あり、捧腹すべくして、又深く誡めとするべし、

手（テ） 説文拳也といへども、今も臂より指に至るまでの総名なり、

指（ユビ） 手足並に稱す、但手の大指を、巨指といひ、足の大指を、拇指（ホシ）の字を用ひ、これを別つ、

爪（ツメ） 手足並び稱す、

足（アシ） 腰以下の総名なり、

○単語圖第七

蟬（セミ） 種類多しといへども、概して蟭螟（ナムシ）より化生す、蟭螟（ヂムシ）を、形鳥蠋（イモムシ）の如し、土中にして復蜻（ニワダフムシ）と

ある、又ニレヤドチと称す、數日を經て、蛻して蟬となる、無脊動物の一つにて、多節動物の昆蟲類なり、

蜻蜓（トンボウ） 是亦種類多しといへども、其初ハ水蠆（ヤマメ）といふ、六足にて、鋸齒あり、水中に育て、後岸に上り、背裂けて蜻蜓と為る、是亦多節動物にて前に同し、

蜂（ハチ） 種類多しといへども、蜜蜂の、蜜を釀して、人生の用に供するが如き者無し、是多節動物の卵生の者なり、

蝶 綠色なる小毛虫の、化する所あり、又形大なるハ、橘虫の化する所あり、目并屬蜻蜓に同じ、

蜘蛛（クモ） 其類多し、無脊類、多節動物に屬す、形小にして、手足蟹の如きを以て、さくがにの稱なり、

蛇（ヘビ） 古名へミといふを以て、反鼻の音ありといふハ非なり、又くちなは、あやゐ等の稱あり、種類多し、爬行（ハカウ）動物にして、これを蛇類といふ、

蜈蚣（ムカデ）　其足、左右相對したる、四十足あり、其足殘
手と見做し、相對したるを以て、向手（ムカテ）と称す、俗
ふ、百足の字を用ひれども、百足は、馬陸（ヤスデ）の一
名あり、此類多節動物ふ属す、

蛙（カヘル）　捕へ来るに、必其故處（モトノトコロ）ふ歸る、故ふかへる
といふ、蝦蟆（エツタカヘル）、蟾蜍（ヒキ）、共ふ此属たり爬蟲類の無
尾属とす、

蟹（カニ）　總名あり、品類甚多し、概たるふ、両螯（フタツノハサミヤツノアシ）八跪
ある者、此類なり、海中ふ産して、食ふべき歟、
蝤蛑（カサミ）といふ、是前の蝦と同科目あり、

龜（カメ）　甲ふ、六角の紋十三ありて、池澤ふ棲む者
を常とす、其海中ふ棲むを、巨大たる歟、蠵龜（シヤウカクキウ）
といふ、前と同科目あり、

松（マツ）　常緑の木ふて人の識る所あり、葉太く、枝
硬きを、黒松（ヒ）といひ、葉細く枝軟き（ヤハラカ）歟、赤松と
いふ、俗ふ雄松雌松と稱すれども、雌雄ふ非
らず、並ふ一株ふ、雌花雄花ありて、二十一綱
九目ふ属せり、

竹（タケ）　淡竹（チク）、苦竹（ハタケ）等、皆年を經れば、花開き實を結
ぶ、是麥類の大なる者にて、其花三雄蕋二

雌蕋あり、三綱二目に属せ、

梅（ウメ）　種類三百餘品に及ぶとなん、其原種ハ野梅より出でたるなり、並に皆多雄蕋一雌蕋にして十二綱一目に属せり、

椿（ツバキ）　支那にて山茶といふ、常緑木にして其材堅く、實より油を搾（シボ）る、其花多雄蕋、上分れ下合して、一體を為せ、十六綱五目に属せり、

山吹（ヤマブキ）　其花單葉（ヒトヘ）千葉（チヘ）あり、八重山吹、漢名ハ棣棠、一重ハ金碗といふ、灌木なり同訓に因りて、款冬に混ずれとも、款冬（カンフキ）ハ常に菜蔬と為る者なり、又色に因りて、茶蘼（トウビ）といひ、并に非なり、多雄多雌蕋にして、第十二綱五月、薔薇科に属せり

櫻（サクラ）　品類多きこと梅に匹（タクヒ）し、其花一雌蕋多雄蕋、萼に附し、十二綱一目に属せ、此樹花を賞し、實を食ひ、皮ハ工匠櫠樺（マゲモノ）を綴（トヂ）、材ハ剞劂（ハンギレ）の刻板となし、花實共に具して有用の品なり、

牡丹（ボタン）　中古がらんと称せ、真の牡丹に非ず、木芍藥なり、牡丹を紫金牛（ヤブカウジ）類にして、花の賞

すべきを一此木支那李唐の時よりこれを賞
し遂に牡丹と稱ふ灌木にして多雄蕋一雌
蕋あり十三綱二目に属す

燕子花（カキツバタ） 中古訛りて、杜若の字を以て行なる、
杜若ハ俗に、薮若（ヤブメカ）荷と称ふ、懸（ハルカ）に別あり、此草
劇草（バリン）の類にて、三雄一雌蕋あり、第三綱一
目に属す

百合（ユリ） 総名あり、均等の六雄蕋にて、一雌蕋
あるを以て、六綱一目に属す、其多類なる中
にて、山野自生の者を本種とす所謂さゆり
にて、又笹百合（サユリ）と称す、其他山丹（ヒメユリ）卷丹（オニユリ）等愛
すべき者多し、

柳（ヤナギ） 古ハ矢幹（ヤガラ）に用ゐし故矢の木といひし轉
なりといふ、樹に雄木雌木ありて、雄樹に雄
花を開き、雌樹に雌花を開く、二十二綱二
目に属す、

桔梗（キキヤウ） 古名あり、のひふき、又あさがほといふ、
牽牛花（アサガホ）、槿花（ムクゲ）と同名あり、五雄蕋一雌蕋にし
て五綱一目に属せり、

萩（ハギ） 漢名胡枝子花といふ、万葉集芽子（ハギ）に作り、

續日本後紀、芳宜花ハ作る、灌水なり花紫なるを常とし、又白花、紫白交れる者あり、十雄一雌蕋にして、十七綱四目に属せり、

菊（キク）　和名からよもぎ、通じて漢名を以て行なる、其子を培養するに因りて其花變化窮なく、種類數ふべからず、花の中央に、雌雄両全花ありて、周圍ハ又雌ハ花あり、十九綱二目に属せり、

南天（ナムテン）　南天燭の略なり、梅雨中六瓣の小白花を開き、實を結ぶ、其花六雄一雌蕋第六綱一目ハ属せり、

水仙（スイセン）　和名を雪中花といふ、下學集に出づ、近來多く栽る所の、矮少（チヒサキ）の者ハ、支那漳州の種なり、臺灣水仙と号し、重修臺灣府志に其ことをいへり、六雄一雌蕋にして六綱一目に属せり、

○單語圖第八

鶴（ツル）　又たづといふ、丹頂なるを仙鶴と稱し、此の如き脚長き類を、涉水鳥といひ、其他禽類ハ皆有脊動物の部あり、以下同し、

雁（ガン）　和名かりといふハ鳴く聲より因りて起れる名なり、其他鶯烏（ウグイスカラス）、鵑（ホトトギス）、並に聲より命けしなり此の如き、蹼（バンカキ）ある鳥を掌形足（シャウケイソク）鳥と称ひ、

鷹（タカ）　此類の鳥、皆雌を貴ぶ、形雄より大ふして、能衆鳥を摯（ウ）つを以てなり、啖肉鳥類にして、鷙鳥中の一なり、

鳶（トビ）　是亦鷙鳥の属なり、好んで物を攫（ツカ）み去り、動もれハ、鷄雛雀児を害す

烏（カラス）　俗に里烏（サトガラス）といふ、其嘴細き故以て、又ほしぶと烏といふ、鴉（キヤウガラス）ハ其嘴太し、故にはしぶと

ぶらいと稱ひ、此類并に雀類にして、鳥鵲屬と稱す、

鷄（ニハトリ）　古にかけといふ、家鷄の字音なりといふハ誤れり、家鷄を俗ふにハと称しまた、食用に供する者なり此類に属する者多種あり

鳩（ハト）　嘴本（ハシノモト）に皮膜あるを以て、鷄類に属ひ、漢名を鴿といふ、通して鳩字を用ひるなり、家に養ふを家鴿（イヘバト）といひ、野に在る者を野鴿（ノバト）といふ、

雀（スズメ）　是亦鳴く聲の小鈴に似るを以て、鈴女

と名づけしなり、此類に属する者多し、

燕（ツバメ）　即雀類に属ぢ、本名つばくらめの略にて、又つばくらつばめとも云ふ、春暖を越ひて人家に来り、子を育て、育し終りて帰る、

鶯（ウグヒス）　支那にて、柴鶏（サイケイ）鶏と云ふ、春月鳴きて、其聲美あるを以て、鶯字を假り用ひあり、亦雀類に属ぢ、

馬（ウマ）　本名うま、後に轉じて、むまと称へ、又訛りておまといふ、驢駱駝（ロラクダ）等、皆一種類にして、共に民用に益ある者なり、此類を厚皮（コウヒ）動物と

ぢ、

牛（ウシ）　服役（フクエキ）食用（ソカフ）共に乳を採る迄以て、六畜（リクキウ）中最益ある者なり、且其皮角骨血、盡く用をなさざるなし、其草を食ふ、噛（カミ）て反出（カヘシ）し、再食ふこれを齝（ニレカム）といふ、故に牛羊鹿等の類を翻嚙（ホンカツ）動物といふ、

猫（ネコ）　啖肉動物なり、本ねこまと云ふ、又かふの称あり、原舶来なりといふ、然れども八丈島山中自生の猫多し、

猴（サル）　通じて猿字を用ひれども猿（デチカサル）は和産なし

其類我國にも少し、これを四掌動物といふ、

兎（うさぎ） 近來家に畜ふ所の白兎（ムクキノウサギ）は、支那明崇禎中始めて外國より渡る、我國には、大古より有りといふ、是齧齒（カッシ）動物なり、

熊（クマ） 喉下に、半月形ある者を、真の熊とし、形大にして人の如く立つ者を羆（シクマ）といふ、北海道に多し、并に啖肉動物なり、

鹿（シカ） 志かの原牡鹿（フシカ）の名にして、又さをしかといひ、其子をかごといふ、反齒動物に屬し、

狐（キツネ） 又きつとつねといふ、くつねけつね等の訛称あり、啖肉動物にして、諸所に在り、只四國二島には絶て無しといふ、

狸（タヌキ） 種類多く、虎狸（レバフリマミ）、貓狸（マミダヌキ）、きるで狸、八文字等の類ちり毛を筆に作り、皮を風箱（フイゴ）に用ゐ、其用頗多し、亦啖肉動物に屬し、

鯛（タヒ） 近來支那より棘鬣（キョクレフ）魚といふ、雌雄形を異にし、其他海魚、鯛の名を冒（オカ）せる者多し、

鯉（コイ） 淡水に産する、鯉の名を冒し者亦多し、鯉鯛並に我國、盛饗欠くべからざる者とし

鮒　種類多し、近江琵琶湖の源五郎鮒、武蔵隅田川の干瓢ぶつふ、海内無比の産とす、

金魚　元和年中舶来せしより、種類百出、變幻窮なし、金鯉、金鄭、金鼈、金鰍等の別あり、其尾は三ッ尾、四ッ尾、株尾、房尾、獅子尾、鮒尾等の稱あり、詳は金魚養玩草に見えたり、

鰻　本名むなき、轉してうなぎといふ、猶うめとむめといひ、うまをむまといふが如し、又鰻鱓に作る

連語圖

單語を連續して言辭を成すを、教ふるあり、下同し、

第一

神人　天地　萬物　主宰　善道　信義

祖父　祖母　父母　伯父　叔父

伯母　叔母　親子　兄弟　姉妹　親愛

友愛

神は天地の主宰にして、主は、宗廟の木主より出て、本とする者をいふ、宰は、周禮、注に、大宰は、治官之長、兼ニ総ノ六官ニ也と、人は萬物いふ、是猶根本にして、掌り、給ふをいふ、

の靈なり、尚書泰誓の語によりて、○善道を以て身を脩め、信義を以て人と交る○親父を子の間は親愛を主とし、兄弟の際は、友愛を專とす、○親の父を祖父といひ、親の母を祖母といふ○親の兄弟は伯父叔父といひ親の姉妹を伯母叔母といふ、

第二

學校　書物　手習　算術　事物　文字

授業　午前　午後　運動　遊歩

學校に出でゝは、校は、夏の時の學の名あり、それより出でゝ、鄉學の名とあり侯

國の學をいへり、今は總ての、教授所の名となり、出は自家よりそと其所に出るをいふ、即學に入るをいり、相反するを以て惑ふことなかれ、書物を讀ゝ、書物は書籍をいふ、日用の書き物にも、又手習すべし、手は、寫字の古名にて、萬葉集に、義心の字を手師の義に用ひたり、其書寫を習ふを以て、手習といふ○書物は、事物の理を知り、手習は、文字の形を學ぶ、○授業の始は、午前七時、授業の終は、午後三時なり○讀み書きの外は、算術を學ぶべし、○遊歩を為すは、運動のため運動は氣血を運動するをいふ○運動を為すは、氣を散ず體を養ふが為、○運動をすれば、又書物を讀ゝ、手習し、算術を學ぶ、

第三

其處　此處　何處　何時　往く　歸る

彼の　此の　彼　是　近き　遠き　町　里

朋友　親類　學問　智識　家業　富

君は其處に居て、書物を讀む、予は此處に在りて、手習ひ、○彼の小兒は、何處へ往きしや、此の女子は何時歸りしぞ、○彼は近き處の、朋友の宅に往き、用は古の鳳字にして、鳳飛、といふ、群鳥從ふ、故に同門をも同師をも、用といふ、又志を同くするを友といふ、是は遠き處の、親類の家より歸る、○近き處と、二三町にすぎず、遠き處は五六里に餘る

り、○彼の朋友は、常に學問を好む、是の親類は、能く家業を勵む、○學問を好めば、智識を增す、即智識とあり前に所謂事物の理を明むるをいふ知識とも別あり、家業を勵めば、富を致す、

第四

地球　日　月　晝　夜　今年　去年　春

夏　秋　冬　東　西　南　北　風　雨　霜

雪　寒　暑　雷　林　叢　花　開　蟲　鳴

地球は日を周りて轉ず、周るは、大陽を廻るをいひ、轉は地球の自轉をいふ、月は地球に隨て環る、地球と共に、大陽を環る、○日の

ある間を、晝といひ、日の隱れて後を、夜といふ、○朝日のかゝるを東とし、夕日の方を西とす、○去年の秋は、冷〻して霜早く、今年の春は、暖かにして雨そゝぐ、○春乃日は、林に花開き、秋の夕も叢に蟲鳴く、○夏は南風多く、冬は北風多し、○夏は暑くして、そゝりく雷鳴す、冬は寒くして、ときく雪降る、○暑き時は、草木茂り、寒き時は、泉水凍る、

第五

穀類　魚類　獸肉　鳥肉　野菜　菓物　水　乳汁　酒　煙草　養生　健康　勉強

日本の人は、常に穀類魚類を食し、西洋の人は、常に獸肉鳥肉を食す、○野菜は煮たるを食ふべく、生菜の食ふべきは、一二に過ぎれども、菜類菓の煮て熟せるをいふ、消化し易からんば、果の熟せざるは、物は、熟せざるを食ふべ、其物、往々清酸を含むを以て、人生に害あり、○水と乳汁は、牛羊の漿を、清酸を、然ふ、きり、因りて、我國、古は朝庭より、諸國に命じて獻らしむ、健康をたもつ酒と烟草は養生に害なり、○勉強は己能くせんとも、勉強ひて為る事なり、今は勤學の別名の如くなれり、健康より生り、健康は養生より來る、○養生の人は、食物と飲物とを擇び、勉強の者は、朝寢と晝寢とを戒む、勉強のみならば亦健康に害あり

第六

衣服　木綿　麻　絹
綿入　襦袢　羽織　毛織　帽　単帷子　袴　裕
草履　履　長靴　足駄

衣服の料ハ、木綿木綿布をいふあり、麻、大麻苧麻亞麻等を兼ていふ絹、帛絹、絹等蠶絲よりさる者の総称　織毛織羅紗呉羅等をいふあり、○暑き時ハ薄き衣服を著、寒き時ハ、厚き衣服を著る、○薄き、ハ、單帷子婦人凡帳の帷より轉じて、薄き衫の字とあれるなり、よて、厚きハ裕綿入なり、○裕ハ合せさるもの、綿入ハ綿を入れたるあり、○肌ハ貼くるハ、襦袢義詳ふら、襦ハ汗

を濡る義袢ハ半衣の意あられ、ふ、て表を服をるといふ何を據を知らるを知ら、ハ羽織あり、○帽をかぶり、袴を著る、○雨の時ハ足駄をき、又長靴をもく、晴の日ハ、草履を用ゐ、又履をもく、

第七

大工　左官　家　柱　壁　屋根　下地　軒
中塗　上塗　棚　押入　畳　建具　木　瓦
石　机　書架　墨　硯　筆　紙　和漢　西
洋　庭　池　春秋　景色　朝夕　眺望
大工ハ、大工ハ、今いふ棟梁よりて、工匠の通名をも、概ねての称とあらば、近世ハ拙匠をも

れ家を造り、左官ハ義詳おらを、逆古禁中造営ニ
妬るとらふ、其説受領して、何時ふ称せしを、
確とをへらひ壁と塗る○家ハ柱を立て、後
ニ屋根をふき、壁ハ下地を作りて後ニ土をぬる
○屋根より軒（撂の稱あり）の総をつけ、中塗より上塗をお
ひ、○棚押入をつけ、疊（借字ニして、疊を敷く物の総称おり）を、遂ニ今の製
とあをり、其表の席、備後ニて八、石龍鬚を用
て織る、茣蓙ニて織るを琉球といふ、建具
（戸障子等の総称）を入る○我邦の家ハ、木ニて作り、西洋
の家ハ、瓦石ニて疊む、○前ニ机を居る、後ニ書架
（書を載せ置く棚あり）を置く、○机ニハ、墨硯筆紙を載せ書
架ニハ和漢西洋の書を積めり、○庭ニあまたの

原鐵字及富貧老幼字ハイ行字ニ属モ改正本ニ從フ

花を栽る池ニ多くの魚を畜ふ、○春秋の景色（借音ふり其實ハ漢語ニ非らひ）もあり、朝夕の眺望もよし、

第八

起（オキ）　臥（フス）　働（ハタラク）　飽（アグ）　賢（ケン）　愚（グ）　教（オシフ）　問（トフ）　恥（ハヂ）　覺（オボユ）
藝（ゲイ）　誨（オシフ）　厭（イトフ）　急（キフ）　綾（ユルク）　走（ハシル）　歩（アユム）　躓（ツマヅク）　疲（ツカル）　照（テル）
益（エキ）　有用（ユウ）　珍（メヅラシ）　○賤（イヤシ）　弄（モテアソブ）　棄（スツ）

朝ハ五（ゴ）時ニ起き、夜ハ十時ニ臥（フ）を、○働く和字ハ人の動作を勤むるをいふ　時ハ、勞（ラウ）を厭（カ）ふ、食（クラ）ふる時ハ、飽くを求（モト）めず○賢き人ニハ、事を習（ナラ）ひ、愚なる人ニハ、物を教ふ、○知らぬ事ハ、知りしる人ニ、問ふを恥ぢ

び、○覺えし藝ハ、覺えぬ者ヨ、誨ふるを厭そび、○急ヨ走るときハ、速けれども、躓くことあり、緩く歩むときハ、遲くれども、疲ることなし、少年の躁進を誡むる語あり、進むこと疾きものハ、退くこと速し、但し遲疑して、進ミ取ることもへらば、此語忽ちもて、勿れとハ非ず、○無益の物ハ、珍しと雖、弄ぶべからず、有用の品ハ、賤しと雖、棄つべからず、物を翫び、志を喪ふと、いふことあり、人々奇を好むヨ走りて、其本を失ふときハ、實際ヨ益なきをいふ、賤しく見ゆる物も日々欠くべからざるハ、厭ひ棄つべからずと、ふ、

第九

前　左
後　右
勉　惰
難　易
早　遲

破　堅固　長　短　強　弱　優　劣　剛
柔　曲　折　撓　逆

もゝ、その事、意を注して、百事自省るへきをいふ、前ヨのみいそげば、後ヨ必ずおくれ、右ヨのみあぐれば、左ヨ必ずひきくなる、○勉むるとハ、勤惰西立せざるハ理なれば事を成さんとヨる者ハ勉めざる事なきをいふ、惰らぬこと、惰るとハ、勉めぬこと、○勉むる時ハ、かゝる事も、成り易く、惰る時ハ、易きことも、成り難し、○早く成るものハ、破れやすく、古語ヨも、大器晩成といふ、速ヨ成れるハ、必大器ヨ非ず、非ずヨとヨハ非らべし、遲くなるものハ、堅固なり、遲くヨ成らばとも、倦ず厭

人之と勿れとふ、○長きは短きを劣る、短きは長きを呼ぶ、非弱きを守れば、怒りて、短きは劣る事あり、短きは劣るハ、長きを恃ふ、弱きを守れば、誇るの致そ、勝あり、優ば、剛あらん遂は強きは優るときあり、優ると、欲する者ハ必柔を以てこれを守る、これを常は勝の道といふ、○剛きものハ、折ること有り、柔なるものハ、曲ることあり、撓まば折れざるハ、剛の徳、曲らば逆らハざるハ、柔の徳あり、鑄の折るハ、真の剛は非ず、鉛刀の撓むハ、真の柔は非ず、其弊あり、是を徳といふ、

第十

秤目ハ十毛毫の畧を、一釐正音離なると音便りにといふ又支那の俗省りて厘は作る、張簿は記とそる、便宜なる故なり、

と、いひ○十分を一匁原ハ、匁は作る、是錢の省ふと云へり、然れとも、方今ハ、別は錢の目あるを以て、可なりとも、作るを以て、可なりとも、目といふなり、

尺の名ハ十毛氏、一釐といひ、○十釐を、一分といひ、○十分を、一寸といひ、○十寸を、一尺といひ、○十尺を、一丈といふなり、

外目ハ、十寸抄の省ふう古算書孫子の量あり後世支那にハ此位ふ一斛斗外合勺撮圭粟の位を、一勺といひ、○十勺を一合といひ、○十合を、一外といひ、○十外を、一斗といひ○十斗を、一斛とつふ

地割ハ、六尺四方ヲ一坪トいひ、又一千歩トいふ、○三十歩ヲ一畝トいひ、○十畝ヲ一段又省テ反ト作ス トいふ、

路程ハ、六十間ヲ一町トいひ、○三十六町ヲ一千里トいふ、古ハ六町ヲ一里トシ、今ハ三十六町ト定まれり、

線及度の圖

直線 縦横並ブ直ナル線ノ総名

曲線 直ノ反ハ波線 波文ノ如キヲいふ

折線 屈折ノ線ナリ

螺線 螺類ノ旋文ノ如キヲいふ、但螺ハ左旋モ是ハ左右ヨリ

渦線 渦ハ今ノ水ノ如ク、旋リ流ルヲいふ、

縦線 又垂線ノ縦ナルヲいふ、

斜線 直線ニシテ、斜ナルヲいふ、

平線 直線ノ横ナルヲいふ、

直角線 縦横ニ拘ラズ正斜ニ拘ラズ、

矩ニ合セルヲ以テ、直トいふ

並行線 是亦縦横正斜ニ拘ラズ、二線ノ距離、均シク並ブヲいふ

聚交線 数線ノ聚リ交ル義ナリ

直角 前ノ線ニ同シク、但前ハ角ノ目ナリ、此ハ角ノ目ナリ、

鋭角鈍角 角尖ノ、鋭鈍、直角ヨリ名ヲ、鋭角ハ弧弦ヲ以テ喻ヘシフ、

故ニ弧ヨリ弦マデノ間ヲ、矢ノいふ、

直径 邊ヨリ邊マデ直ル義ナリ

半径 径ノ折半ナル故ニ半トいふ、

周邊 邊ハ隅ヨリ隅ヲ周廻シテ、邊ヲ周ルノ尺ナリ、圓形ノ名ニ非ラズ、

同心環 形ノ圓ニ長径短径ヲ撞圓ノ径ハ、長短ヲ異ニスル故ニ別ニ名づく、

直径一寸ノ環 直径ヲ定ムルヲ以テ、環ノ大小ヲ定ム

平方 五分ノ平方ヲ、四ツ合テ、一寸ノ平方ト為ス、

寸の平方を、四倍して、二寸の平方とある事を教ふるあり、さて一寸の平方、二を并せて、二平方となり、一寸の平方、半を分けて一分の一の平方寸ふるを示ひ

尺度

五寸の尺度ハ、三寸と、二寸の尺度より成り、三寸の尺度ハ一寸と二寸とより、成れるを示ひ

一分二分五分の度、これ同し、

圓ノ度　四分周　象限

是凡ての圓形の度を示ひ圖よりして、十二ヨ分

ろ〻ハ、周天十二宮の度あり、又これを四分して象限といふハ、地平より、天頂ヨ至ラの度ふして、平面の名ヨ非ひ地より天ヨ達ラまての象の限の義なり

○面　平面を及體全體の形狀とのふ

三角　方形　五角　六角　七角　八角　以上の角

のミヨ止らばといへども是其概を舉けしてふり、今存せばといへども其形を假りて

古の玉の名ヨ

勾股形

両等邊三角形　一日主形　主八

竪を勾といひ横を股といふ、其斜ふる面を弦といふ、是鏡表より出でたる形あり勾股と称ふ

長方形　斜方形　不等邊斜方形　不等邊兩直
角斜方形　半楕形　楕形　一邊弧三角形　上邊の彎
ふ卵形又蛋圓ふ　楕圓　楕又楕ふ、俗いびつと云ふ　狹張ふるを
いふ、中古の飯櫃ハ、楕圓なり、今も邊鄙に存せり　飯櫃の義
圓截ふの再六分圓截ふの三分　圓　半圓　圓の兩四分ふ
新月形　上弦前の月形をソふ　環　中空
環ハ服飾なり、以上面ふ　球　半球　球の兩截ふ　球缺　盃形球の半ふ
りて厚薄ふ拘らず　截る形　楕圓體　四面體　形ハ三角ふ
四面ハ同寸なり　立方體　六面同寸なり　正方體ふ
長短ふ拘らず　方柱、圓柱　并ふ長さ、其長さふ拘らず　三角柱　三稜柱ふ
圓錐　并ふ、其先尖れるを以て、錐の名あり、　三角錐、方錐

附錄色圖畧解

○甲圖

色の圖ハ、光學家の一部ふして、兒童小學の、能く了ちへき所ふ非ず、其學を窮めんとする者ハ、其專學の人ふ就きて、研究せざれバ其奥を知ること能ハざ然れども、官板甲乙二圖を須布ゆうしハ、粗其梗槩を知りて、大誤あらざらしめんとふり、然れども一目其色を辨ぜ〻しむ、其名義ふ至りてハ、大ふ解し難きあり、是其名を奇僻ふして、俗を駭ふ非ず、俗語の適當ふるハ、俗名ふし

止を得ざれバ古名ヨリ、其中實物ヨリ象りて、他物の、形容そべらぎさるハ、譯名ヨリて標ひ、且又色彩久しきを經て、褪リ、又翻刻摸擬リて、刷印或ハ其真を失ふヨリ至り、其原實を知らされバ、これを、徵をるヨリ所ふリ、今其原を注リて、以て初學ヨリ便ひ、其配合比例等の委曲ハ、官より教授法頒布の日を俟つへし

○土欄中の三色

黃　赤　青　皆日光三角硝子を透りて、生ずる所の原色なり、次ヨリ注ひ

○上欄中の四色

柑色　綠　紫　紺　是亦日光所生ヨリて、前色の混和せしなり、

以上の七色の、本色を驗むるヨリハ、先日光所生ヨリ就て見るへし、

第一色の紫ハ、最下の赤の反射と、青との和ヨリ因りて、生ずるなり、

第二の紺ハ、原色混和の外ヨリ、上の紫を帶ひ、下の青ヨリ接リて、起れる者とひ、

第三の青　是原色の一なり

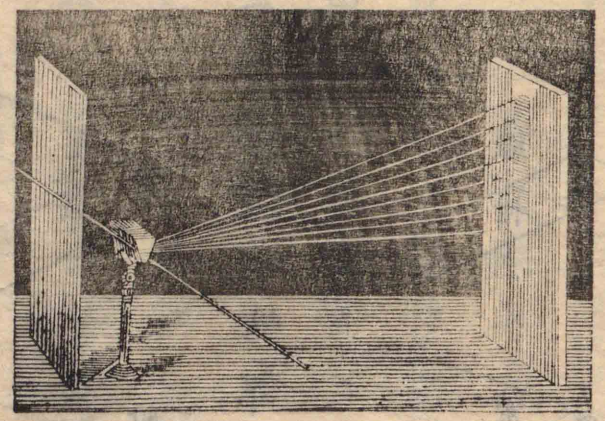
第四の綠　上の青と、下の黃との、混和ゝ因りて生じ、

第五の黃　是亦原色ふり

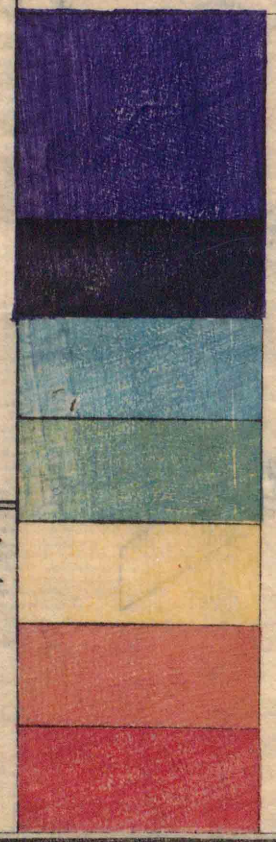
第六の柑　上の黃と、下の赤との、和色あり、

第七の赤　是亦原色あり、

上の如く、紫ハ赤青の和、綠ハ青黃の和、柑色ハ黃赤の和ゝ[illegible]て、已ゝ單色ゝ非ず、故ゝ第二色といふ圖の如し、

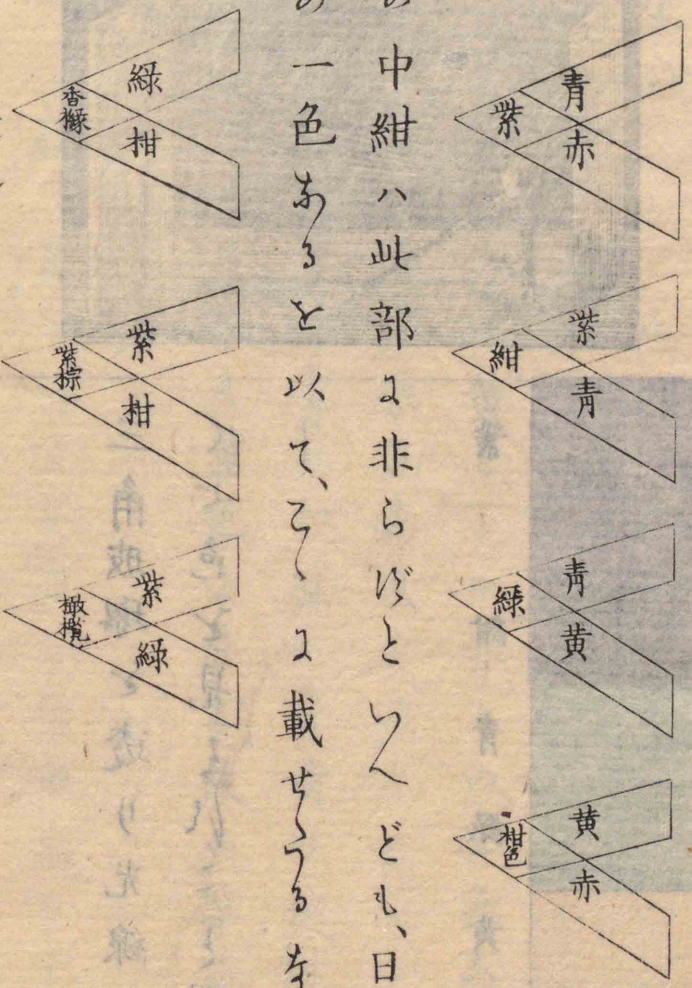


三角玻璃を透り光線屈折して七色を見たること圖の如し



紫　紺　青　綠　黃　柑　赤

青赤合して、紫となる、下其理に同し



右の中紺ハ此部ニ非らざるとゝ雖ども、日光所生中の一色あるを以て、こゝに載せるなり、

右の香橼(カウエン)、紫棕(シソウ)、橄欖の三色を第三色といふ、前に

舉げたる第二色の互に混和したるなり、後に注に

第一級　赤の部属

玫瑰(マイクワイ)色　即紫赤なり、紫を雜へたる赤なり、赤を倍したる紫と見るべし、玫瑰は濱薔薇(ハマバラ)類なり

赤　日光所生の原色なり、洋紅(カルマイン)の色をいふ、

緋(ヒ)　乙歸に、柑赤と、稱する者にして、柑赤の合色なり、

朱(シユ)　即銀朱(シユ)の色なり、

淡紅（ウスベニ）は我國の鶏色（トキ）ふして、西洋石竹（ナデシコ）の花色（ピンク）あり、我國の櫻色といひ、支那の粉紅とつふは、別なり

一等淡き紅あり、桃色と稱するは又これなり

一等濃き紅なり、

第二級

香櫞綠（カウエンリヨク）　香櫞、又枸櫞（クウエン）なる作る、佛手柑（ブツシユカム）として圓き者あり熟されば、淺黃あれど、未熟の者は、黑黃綠なり、此色は合ふ、是綠柑の合色あれば、黃綠柑共なり有り

赤青三色の混ぜるあり、前畫の如し（黃多き色にして、黃なる屬然るに、此色綠字を加ふるは、黃熟の色を混ぜんことを恐れてなり、）

黃　日光所生の色として論あり

檸檬色（レモンイロ）　レモンの熟せる色あり、レモンは香櫞の一類なれども、色淡黃あり、

淡黃（ウスキ）　其色金絲雀（カナリヤ）の羽なる、似たるをいふ、淡字泛（ヒロ）

一、故なこれを注ぐ、

卵色（タマゴイロ）　鷄卵の色なる、類せるを以て、此名あり、其度（ホド）は、藁（ワラ）の色なれども、至淡（コヽロカスキ）の黃あり、

第三級　青色の屬を列ぬ

紺（コン）　藍色（アイイロ）の、微赤を帶ぶる色あり、七色の第二位

玉列一上の紫と、下れ青とを、際をるが故あり

此色余別に論あり

青　日光所生の青もあり空清の色に近し、第二

縹　俗に所謂花色なり普魯士青の色なり、

淡青　即淺縹にして、俗に淺黄といふ、真の淺黄

前の淡黄なり、混ぜくらいし

水色　俗に所謂水淺黄なり、

第四級　柑色の属を列ぬ以下の三級を第

二色と云ふ

朽葉色　柑色の濃き者あり、譯名暗琥珀色（黒色を帶ひたる琥珀色をいふ）

柑色　黄赤の和せるなり、日光所生の色にて、

論なし、支那これを橙黄といふ、

鮭色　譯名あり、松魚肉色をいふ、

火黄　柑黄二色の、合へるなり、

酥色　譯名あり、乳酥、土面の色をいふ

第五級　緑色の属を列ぬ

橄欖色　橄欖の實は色をいふ、橄欖は常に黒緑

ある故に青果の名ある所至る、此色紫緑の合

へるあり、圖前に見えたり、

緑　青黄の合色にて、日光所生の色あり、

原作茶豆 改山

鸚鵡綠（アウム） 即祖母綠（エメラルト）にて綠珠の名あり綠鸚鵡の羽色に似たり、故に此名あり、

跳豆綠（トウリヨウ） 跳豆の綠色あり然れども生時の色にして、熟せるをいふに非ず、

淡綠（ウスミドリ） 至淡の綠にして、所謂萌黃（モエキ）なり、

第六級 紫の屬を列ぬ

深紫（コイムラサキ） 至濃（ジヨウ）の紫色にして、黯（クラ）ある色、此色我國の古服も、貴人の料なる歟、西洋にても王服とす

紫 紅青の合色にして、日光呼生の色なり、

菫花色（キンクワ） 即乙圖の紫青あり、紫花地丁の花色に

して、我國の桔梗色（桃花蓮葉）に近し、

藤色（フジイロ） 即淡紫にして、藤花の色あり、此色西洋にライラックといふ、然れども我邦未だ見ざる植物なり、故に換るに藤と以てす

薄藤色（ウスフジ） 至淡紫にして、古の葡萄色（エビイロ）あり（延喜式今の者とは異あり）西洋にウェンダといふ、亦植物の名にして、我國にあり

第七級

栗色（クリイロ） 棕色（ソウ）に玫瑰色を帶ひたるなり、譯名葡萄

酒色とは、櫻色（ソウヨウ）、棕櫚（シュロ）の毛の色なり、俗にいふ鳶色に近し、紫櫻色（シソウ）、紫柑の合色なり、圖上に見ゆ、丁子色（チベウレイイロ）、紫棕（シュ）にて、更に黄黑を帶びたる、香色にして黑みある、是あり、譯名鼻烟色（カキタバコ）、源氏物語に丁子染と稱し、灰色（グワイレイヨク）、至淡の棕色にして、今いふ鼠色の、稍棕色を帶ひたるなり、

○乙圖

此圖に記したる數字は、彼の玻璃より生ずる

日光色の分量にして、此の如き輪を、急轉すれば、諸色皆無色の白に歸するあり又此圖の諸環重疊せるは、諸色の混合によりて、生ずるを見るなり、且一色毎に、配合色あり圖中相對する色是なり、此と彼と、相配合をれば、即來數となる、雖十六の數、相離れば、皆白色となる、猶下に見ゆ、

○原色

黄三　赤五　青八を合せて、十六の數を為す、是配合分量の限とす、三、五、八、合せて、十六となる、是配合色の原數なり、此圖相對する色と、計會をれば、皆十六あり、下圖の如し、

黄三　紫赤五青八即十三　上と合せて十六あり

赤五　緑黄三、青八、合せて十一あり
青八　柑黄三、赤五、合せて八あり
これは上の五を加へて即十六あり
上の八を加へて、即十六あり、

○第二色　原色互に混せるあり

柑八赤五黄三　青八、合せて十六あり
緑十三黄三青八　赤五、合せて十六あり
紫十三赤五青八　黄三、前の如し

○第三色　第二色互に和せるあり

香橼十九　柑赤五黄三　緑黄三青八　紫十三赤五青八以上合せて三十二
即十六の倍数あり
撮攬廿四　緑黄三青八　紫赤五青八　柑八黄三赤五以上合せて前に同し
紫棕廿一　柑黄三赤五　紫赤五青八　緑十一黄三青八合せて前に同し

○第二属色　第一色第二色互に和せるなり

柑赤十三　柑黄三赤五　赤五　緑青十九　緑黄三青八　青八　是又合せて三十二あり
柑黄十一　柑黄三赤五　黄三　紫青廿一　紫赤五青八　青八　是亦同し下れに倣
緑黄十四　緑黄三青八　黄三　紫赤十八　紫赤五青八　赤五
緑青十九　緑黄三青八　青八　柑赤十三　柑黄三赤五　赤五
紫青廿一　紫赤五青八　青八　柑黄十一　柑黄三赤五　黄三
紫赤十八　紫赤五青八　赤五　緑黄十四　緑黄三青八　黄三

○第三属色　第三色互に和せるあり、

暗柑四十　紫棕廿一　柑八紫十三と香橼十九　柑八緑十一の和せるあり、
相對もろ　撮攬廿四　緑十一紫十三とこれを和せれば、合せて

六十四より十六の四倍あり、下同し

暗綠 四十三　香綠 十九 柑八 綠土　橄欖 廿四 綠土 紫十三　紫棕 廿一

暗紫 四十五　紫棕 廿一 柑八 紫十三　橄欖 廿四 綠十一 紫十三　香綠 十九

○半不偏倚色

桜栗灰の三色ハ、定れる分量をくして成る者

ゆえ、配合を具セざるが故ゆ、此名あり、

○色の冷熱

青を寒冷色とし柑を寒熱色とし、紫ハ退却の色、

黄ハ前進ひる色あり、是色學士の目をる所ゆ

え、位置の距離より名つくといふ、其餘の深理猶

邃奥あり、此道ゆ入り其室ゆ至りて後これを了

解ス

色圖畧解 畢

教育書及一般書売買
宣文堂書店
TEL (941) 7818
文京・大塚・お茶の水女子大隣り

明治八年十二月廿三日御届濟

東京第拾大區一小區金杉村二百四番地
榊原芳野編

愛媛縣松山魚町　共耕社

熊本縣宇土本町　同今社

三潴縣久留米古賀原町　同分社

東京府下書肆

出版人　第壹大區拾二小區
神田豊島町壹丁目十二番地
五百川喜平梓